

桐生悠々物語 — ペンは死なず

ある原稿を頼まれて、昔の資料や写真を探したら貴重なものが見つかった。「桐生悠々物語---ペンは死なず」という笠井るみ子作の台本である。愛知県民の手による平和を願う演劇の会(平演会)の1988年の公演台本である。

なぜ私の手元に台本があるのか。それにはすこし「わけ」がある。簡単にいえば、私が場違いの舞台に「役者」として出演したので、台本が大切に保存されていた。

薄汚れた台本によると、私は「桐生さんいらっしゃい」から始まり、なんと10回も台詞がある。いま考えると、よくしゃべれたと我ながら感心する。台本には書き込みが多く、どこに立ち、どう振る舞うかが細かく記してある。この台本は、私の宝物だ。

私の役は東京朝日新聞の松田編集長である。下の写真は東京朝日新聞社編集室で松田編集長(左端)が、桐生悠々(右から2人目)と会話している場面。いまから33年あまり前、バブル時代の思い出に残る写真である。日頃うまくしゃべれない私が台詞の多い「役者」とは驚いたが、貴重な体験をさせてもらったものだ。

舞台に立つために読んだのが、井出孫六『抵抗の新聞人 桐生悠々』岩波新書、1980年である。本のカバーには「明治末から日米開戦前夜に至るまで『信濃毎日』『新愛知』の主筆として、また個人雑誌『他山の石』の発行人として、どこまでも反戦と不正追及の姿勢を貫き、ジャーナリズム史上に屹立する桐生悠々」と記されている。久しぶりに再読したが、拙著『災後の新聞』を書いたこともあり、「抵抗の新聞人」の生き方が心に迫った。

さて、舞台のエピローグは悠々の妻・寿々と小谷記者との会話の場面である。悠々を偲んで、小谷記者が「二度と新聞を死なせてはならない」と言って退場する。そして、ラジオから「1987年5月3日、朝日新聞阪神支局に何者かが散弾銃を持って乱入」という放送が流れる。舞台のジャーナリストの一人が、朝日新聞記者たちの声明文を読みあげて幕となる。

一人の「役者」として、演劇「桐生悠々物語—ペンは死なず」に深く感激した。

(2021年6月6日)

